

「 安政の大津波に学ぶ 」 農業新聞・野良ばなし 平成 17 年 1 月 27 日

幕末の安政元（1854）年は各地で地震が相次ぎ、その被害はすさまじく、なまず絵が流行ったのもこの時。その一つ、11 月 5 日夕方 4 時頃、紀州藩沖の大阪湾で震度 6 弱の大地震が発生。当時の広村（今の和歌山県広川町）の養源寺に、大震災発生状況や村人などが成し得たその後の行動が「安政聞録」に残されているという。先日奇しくも、日経新聞と NHK「その時歴史が動いた」で紹介された、濱口梧陵は代々続く紀州の醤油製造の 7 代目店主で、35 歳の働き盛り。自身も大地震に遭遇し高台に向かって逃げる途中、最初の大津波に襲われ、危ういところを助かった。その津波は時速 50 Km、高さは 4.2m で、約 40 分後に押し寄せたことが、京大防災研のシミュレーションで判明している。

その日は今の暦では 11 月 28 日頃。既に、真冬の暗夜となり、余震と何度も押し寄せる津波を避けようと逃げ惑う村人は方向を見失い混乱の極み。その時、梧陵が松明を手し、港へ向かって駆け下る途中、冬枯れた田んぼに残されている刈り取った稲に火をつけた。この機転で、多くの人が高台の方角を確認でき助かった。推定で、97% の村人が助かったというから驚嘆する。

史実は戦前の尋常小学校の教科書に「稲むらの火」として紹介された。こんなとてつもない傑物が突如出現するのが紀州。今も国内外で地震や津波による大災害が続く。自然科学力で、地震を観測し迅速に周知するシステムは最新の情報技術（IT）なら可能だ。現実には災害発生時に、冷静沈着なリーダーがいる・いないの運・不運。何より、事に当たり身をていしたその言行録を学びたい人物の一人。

（ 気象情報システム株式会社 高 津 敏 ）